

教頭会報

栃木県公立小中学校教頭会

発行者 大 網 信 祥

編集 広 報 部

も く じ

◎あいさつ	1	◎特色ある学校	6
◎県の動き 総会・講演会	2・3	◎地区だより	7
◎全国研究大会	4・5	◎ひろば	8

求められる教育環境の充実

会長あいさつ

宇都宮市立陽東中学校 大 網 信 祥



このたびの東日本大震災によりお亡くなりになった方々へ深く哀悼の意を表しますとともに、一日も早い被災地の復興と福島第一原子力発電所の安定化を願うものです。

今年度は、豊かな心と健やかな体を育み、確かな学力を育成することを重視した新学習指導要領が小学校において全面実施となりました。本県では、「とちぎの子どもたちを、自らの力で、自分の未来を力強く切り拓いていける人間に育てる」ことを基本理念とした「とちぎ教育振興ビジョン三期計画」が実施されています。学校においては、家庭や地域と連携し、一層、創意工夫を生かした特色ある学校づくりに努める必要があります。

子どもたちが生き生きと学校生活を送っていくためには、学校環境が安全・安心でなければなりません。改めて校舎耐震化の迅速な推進など学校の安全対策が求められます。また、教員と児童生徒、児童生徒同士の良好な人間関係が構築され、きめ細かな指導が行われるよう、少人数指導の充実が必要です。平成17年度から本県独自の少人数学級の施策として中学校全学年35人以下学級、小学校低学年非常勤講師の配置が行われてきましたが、本年4月15日に学級規模を35人以下に縮小する「公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律」の改正が行われました。今後、国の学級編制の標準の引下げが進行し、小中学校全学年の少人数学級が早急に実現するよう願うものです。

全国公立学校教頭会は、今年度から第九期全国統一研究主題「豊かな人間性と創造性をはぐくむ学校をめざして」を掲げ、子どもたちの将来に生きる力の基盤づくりが学校教育に課せられた使命ととらえ、学校教育の見直しと組織力の向上、専門職としての資質の向上を目指し、継続性、協働性、関与性に焦点を当てた実践的研究の推進を示しています。

栃木県公立小中学校教頭会におきましても、昨年度の第51回関東甲信越地区公立学校教頭会研究大会栃木大会の成果を踏まえつつ、全国統一研究主題を受け、新しい時代を生き抜く心豊かな創造的でたくましい児童生徒の育成を目指し、今日的な教育課題に対応した研究を推進いたします。また、来る平成24年度の本会結成50周年に向け、更なる組織の発展・強化に努めてまいりますので、なにとぞ会員の皆様のご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

—— 県教頭会の動き ——

定期総会

「第49回定期総会並びに研修会」を盛大に開催！

日 時 平成23年 5 月23日(月) 13：00～

会 場 宇都宮市文化会館小ホール

平成23年度の定期総会並びに研修会が、5月23日に宇都宮市文化会館小ホールで開催されました。

定期総会では、国歌斉唱、平成23年度役員報告、会長あいさつ、来賓あいさつ等につき、議長団が選出され、平成22年度の事業報告、会計決算報告・会計監査報告がなされました。また、平成23年度の活動方針案・

事業計画案・予算案等の提案があり、慎重審議の結果、いずれも満場一致で承認されました。その後、本部役員として活躍された方々を代表して、前会長の宇賀神貴様に感謝状並びに記念品が贈呈されました。

後半の研修会においては、講師に株式会社ビスタワークス研究所代表取締役社長の大原光泰氏をお迎えし、演題「最高の能力発揮を引き出す現場づくり『人が輝く経営』」について講演会が行われました。ビスタワークスの取り組みは、まさしく人が輝く経営であり、テンポのよいパワーのある講演内容は、「学校組織マネジメントに直結し、教育現場に即生かせる内容でした」という声がたくさん聞かれました。

来年度は、教頭会結成50周年記念の年となります。



講演会

「最高の能力発揮を引き出す現場づくり～人が輝く経営～」

株式会社ビスタワークス研究所 代表取締役社長 大 原 光 泰 氏



「経営」の発明者、ピーター・ドラッカーはこう言っています。「働く人が満足しても、仕事が生産的に行われていなければ失敗である。仕事が生産的に行われていても、そこで働いている人が生き生き働いていなければやはり失敗である」この時代、真剣に考えるべき問いだと思います。

たとえば、アルバイトスタッフに「あなたの仕事は何ですか」と質問するとします。すると「来店客を案内することです」と表層的な答えが返ってきたりします。別の人は、「てきぱきスムーズに案内することです」と答え、またある者は「お客様に喜んでいただく

ことです」と答える。1人目のスタッフは、決まった給料をもらうために、決まっとおり繰り返すことが仕事と言う。それは仕事ではなく「作業」ですね。2人目は自分の視点で働いている。悪いわけではないが、「趣味」といった方が妥当でしょう。厳しいようですが、自分の関心で働くという発想が七五三問題を作っていると考えてもいいでしょう。仕事をしているのは3人目です。このスタッフは、仕事はずっと「お客様」の気持ちを察している。江戸時代は、「稼ぎ」と「務め」を果たしてこそ一人前と教えられていました。

「作業」のためには知識、技術、マニュアルを覚えさせればいいですね。多くの企業では、それを社員教育といっています。そして、労働者が派遣やアルバイト雇用に切り替えられています。「仕事」をするには、相手の気持ちやわかったり、想像したりする力、人を信じる力、自分の気分をコントロールする力が求められます。ここから、作業力を「専門力」、仕事力を「人間力」と呼ぶことにします。

かつてこの国では、人間力のことを仁徳などと言いました。教育勅語で重視されたところです。そして現代、

経済産業省はそれを「社会人基礎力」と称しています。「前に踏み出す力」「徹底的に考える力」「チームワークの力」のことです。教育機関では「生きる力」といいますね。脳科学の世界では人間性知能といい、生涯をかけて発達する人間の知能であると位置づけています。「他者を幸せにし、自分が幸せになる」力です。この力は、漫然と生きているだけでは発達しません。ホモ・サピエンスとは、ヒトとして生まれて、人の間で悩み、もがき、苦しみや喜びを乗り越えながら人間になっていく生き物ではないでしょうか。しかし生き物は効率的に生きるために、「無意識」で生命を維持するようにできています。恒常性（ホメオスタシス）とも言います。昨日と同じように今日を過ごす定めです。心理学や脳科学によると、無意識行動の時間は睡眠時間も含めると人生の9割を無意識で過ごしているということですね。

そこで、「人を幸せにできる無意識」を「習慣」と言うことにしました。真剣に人の話を聴く、うなずきながら話を聞く、人の悪口や不満を言わない。その逆の無意識を「癖」と言います。いつも怒った顔、愚痴や不満ばかり言う、自己中心。法律さえ破らなければ問題ないと思っているのでしょうか。ヒトも動物ですので、放っておくとそのままですが、戦前の日本では、そんな生き方は許されませんでした。周囲の人が注意してくれたのです。家庭や学校でのしつけが厳しく、兄弟もたくさんいてわがママが言えない。近所付き合いも大事にされた時代です。ですから、無意識に過ごしていても成長できたのです。現代社会では、意識10%を活用して生きなければ、人間的な成長はできないのです。

そうすると、仕事の時間が重要となりますね。とにかく目の前の人を幸せにすることを考え、実践する生き方が大事です。売り上げをあげるためとか、人とうまくやるため、といった次元ではなく、人間としての幸せを手に入れるための重要な課題として認識せねばならないことです。

今回の大震災。ちょうど私は仙台にいました。避難所で、被災者の助け合いを数多く目にしました。『成熟社会』という本を書いたデニス・ガボールはこう言っています。「人間は逆境では優れているが…安全と富を得ると、惨めな目的を失った生き物となりがちである」。あたりまえのように明日がくる毎日に生きていると、いくら人間でも目の前の損得ばかりに目がくらんでしまうのではないのでしょうか。それを強く感じたのが、震災後の春のセンバツ高校野球です。何のために自分たちはプレーするのか、16歳の創志学園高校の野山主将が声高らかに選手宣誓しました。最後に皆さんで聴いてみましょう。

ナレーター：出場32校を代表して、創志学園高校野山慎介主将が選手宣誓をします。

野山主将：宣誓。

私たちは16年前、阪神淡路大震災の年に生まれました。今、東日本大震災で多くの尊い命が奪われ、私たちの心は悲しみでいっぱいです。被災地ではすべての方々が一丸となり、仲間とともに頑張っておられます。人は仲間に支えられることで大きな困難を乗り越えることができると信じています。私たちに今できること、それはこの大会を精いっぱい元気を出して戦うことです。頑張ろう日本！生かされている命に感謝し、全身全霊で正々堂々とプレーすることを誓います。

今ここに私たちが存在する意味は一体何だろうか。そこでのよい行いは一体何か。これは大事な問いです。大きな地震が起きると、今ここに私たちが存在する意味が問われます。今ここで私たちはどうすべきなのかがわかります。極東の島国で暮らし、助け合いをしなければ生き残れなかった民族です。日本人は遺伝子が嘘をつけない。そして、不確かな時代だからこそ、信念をもつ力が問われます。とにかく信じ切る力。裏切られては悩み、苦しむことも増えます。しんどい思いもし、孤立感に見舞われたりもします。ただ言えることは、それこそヒトが人間に成長していく成長痛であるという事実です。先生方におかれましては、どうかその初心にあった信念で教育に当たり、生徒ばかりでなく先生方のよきリーダーとしてこれから精進されますように。私も努めます。皆さんと一緒にこの国をぜひもう少しいい国にできるようにしていきたいという願いを込めてお話をさせていただきました。最後までご清聴いただきありがとうございました。

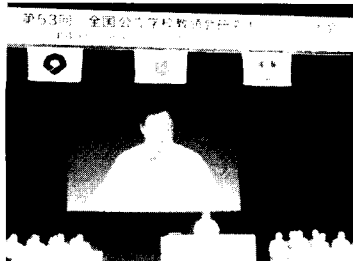


第53回全国公立学校教頭会研究大会（和歌山大会）

開会式・郷土文化紹介

＝ 黒潮の熱い想いを全国へ ＝

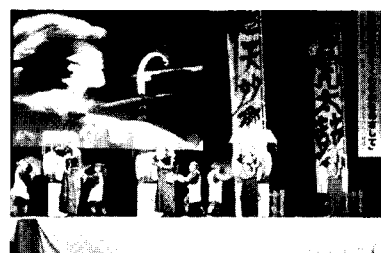
宇都宮市立国本中学校 坂 野 忠



井部良一全公教会長あいさつ

海と山に囲まれ、豊かな自然の恵みを受ける紀州和歌山市において、8月4日・5日と全国公立学校教頭会研究大会が開催されました。初日午前中は、和歌山ビッグホエールを会場として開会行事と基調提案及び郷土文化紹介が行われ、全国から集まった全公教会員を温かく受入れてくださいました。

郷土文化紹介では、黒潮・躍虎（やっこ）太鼓保存会による演奏が行われました。1曲目は直径4尺もの大太鼓を使った力強い演奏、2曲目は黒潮の大波や波しぶきを表現した動と静の対比のある演奏、3曲目は戦勝太鼓に踊りの要素を加えて現代風にアレンジされた躍虎太鼓の演奏でした。雑賀（さいか）鉄砲衆の4人が火縄銃を4発ずつ撃ちましたが、会場に響き渡る轟音と白煙、火薬のにおいに圧倒されました。



躍虎太鼓と雑賀鉄砲衆

シンポジウム

『学ぶ楽しさ・わかる喜びを感じ

未来に向け力強く生きる子どもの育成』を願う

宇都宮市立上河内中央小学校 高 橋 玲 子



大会第1日目後半は、シンポジウムが開催されました。東京学芸大学教授の永田繁雄氏がコーディネーターを務め、文部科学省初等中等教育局視学官の太田光春氏、和歌山県出身の西武ライオンズ元監督の東尾修氏、立命館大学教授の陰山英男氏と著名なシンポジストを迎えて、テーマ『豊かな人間性と創造性をはぐくむ学校づくり』に基づき、サブテーマ『学ぶ楽しさ・わかる喜びを感じ 未来に向け力強く生きる子どもの育成』について、

それぞれのお立場から実践を紹介していただきながら示唆に富むご助言をいただきました。

永田氏が「確かな学力と言葉の力の育成」「信頼関係とコミュニケーションの確立」「地域に根ざし地域と連携した学校運営の充実」の3つの視点を示し、豊かな学力は人間形成を通して育てられるもので、学力形成と心や体の問題との関わりについて話題を投げかけられました。太田氏は、知識基盤社会で力強く生きる子を育てるには、学校は生涯にわたって学び続ける学びの基盤を作り、学校や家庭は自尊感情を培い自分の持ち味を発揮できる子どもの育成が求められていること、そして主体的な学びは言語活動の充実にあると学びに焦点を当ててお話をいただきました。東尾氏は、野球選手として自分を鍛え他人と競い合う中で負けを財産にして身につけた成功の方法と、監督としてチームを動かすために如何に人の管理が大切であったかを話されました。陰山氏は、教育のグローバル化に対応するには、事実即して分析し指導の効率化を図ることが大切で、教育のプロは結果を出すことで自尊感情も育っていくこと、それには基礎的なことを早い時期に身につけさせる必要があると実践を踏まえて話されました。

最後に、永田氏が教師集団は協調しながらも志を持って組織力を高めていってほしいと締めくくられました。学習指導要領の実践に向け、気持ちの高まりとともに教頭としての取組について考えさせられました。

第3分科会「教育環境整備に関する課題」

下野市立国分寺小学校 鱒 渕 光 男

8月5日の第2日目は、第3分科会に参加しました。会場には、1グループ8人ずつで30グループの先生方が入り、背もたれが触れ合うほどの状態の中、以下の3つの地域からの提言発表で始まりました。1つ目は、地元の和歌山県から、「地域連携・学社融合の推進を目指す取り組み」として、屋外運動場の芝生化が地域との連携や融合につながることで、さらに体力と学力の向上等に効果が上がった発表。2つ目は、熊本市から、教頭が保護者・地域の方々を諸活動に巻き込んだり、もてなしたり、コーディネート力を発揮することで教育環境の整備がなされた発表。3つ目は、箕面市から、小中一貫教育の取り組みを通して、地域に開かれた特色ある学校づくりを組織的に展開するとともに、その中での教頭の役割についての発表でした。

どの発表も目標を明確にして、いろいろな手段を取り入れ教職員が意欲的で、学校の組織体制を整備して取り組んでいることで効果が現れていると感じました。グループ内の各校の取り組み状況や率直な意見など情報交換ができました。今回の大会に参加させていただき、今後の自校の取り組みに大変参考になりました。

第6分科会「副校長・教頭の職務に関する課題」

矢板市立片岡中学校 斎 藤 学

第6分科会では、①「人材育成を図り、学校組織を活性化するための教頭としての役割」（茨城県那珂市小中学校教頭会）、②「教員の子どもと向き合う環境づくりを進める際の教頭の役割」（兵庫県丹波市小学校教頭会）、③「学校・家庭・地域の連携における教頭の役割について」（和歌山県紀美野町教頭会）、の3つの実践に基づく提言が示され、それぞれの提言を受けてグループ協議が行われました。①については、若手教員やミドルリーダーの育成のために教職員評価の活用や校内研修の充実に努めていること、②については、学校行事や会議の精選と内容の充実を図っていること、No 残業・会議 Day や No 部活動 Day を設定していること、また子どもとの触れ合いの機会を教育課程に位置づける工夫をしていること、そして③については、学校便りやPTA広報紙、学校のホームページなどを充実させ、地域・家庭との連携や保護者への啓発・情報発信に活用していること、学校の教育活動をよく理解してもらうため、学校公開の方法に様々な工夫を試みていること、などについて活発な意見交換がなされました。協議された内容は全国に共通する課題ですが、全国各地の学校が地域の実態や特徴に合わせて、独自の取り組みにより対応・解決を図っていることを知ることができ、たいへん参考になりました。

全国研究大会に参加して

「黒潮の熱い想いを全国へ」

那珂川町立薬利小学校 寺 澤 洋 子

今年の全国公立学校教頭会全国大会は、8月4～5日の2日間、「水と緑と歴史の町」和歌山市においての開催でした。前日の3日は、宇都宮から約5時間、県北からはほぼ1日の行程でした。

「黒潮の熱い想いを全国へ」のスローガンのもと、第1日目は、和歌山ビッグホエールを会場として、午前中に開会行事と郷土文化の紹介、午後は全体シンポジウム、そして第2日目は、8会場で10の分科会という日程でした。例年の3日間開催が2日間となったことで、やや過密な日程という感はぬぐえませんでした。その分、内容の凝縮された大会であるという印象を持ちました。

1日目の郷土文化の紹介では、黒潮・躍虎太鼓と雑賀鉄砲衆の勇壮な響きが、そして全体シンポジウムではシンポジストの熱い想いが会場全体に伝わりました。2日目の分科会では、「教職員の専門性」の課題のもと、山形県から、特別支援教育の充実に関しての提案、また滋賀県からは学校力を高めるための提案発表があり、どちらも非常に今日的な課題で、熱心な討議が行われました。

全国各地の学校の様々な取り組みに触れ、さらに情報交換しながら見聞を広げ、研修を深めることのできた2日間でした。

このような貴重な研修の機会をいただいたことに心より感謝申し上げます。

◀ 特色ある学校 ▶

地域に支えられた里山づくりによる環境学習

日光市立落合中学校 堀 加 津 雄



近年『里山』は環境学習のキーワードとなっています。里山は①切っても萌芽更新するので無くなりえない資源である②二酸化炭素を減らすエネルギー源になる③生物の多様性を維持する空間である、というすぐれた特徴を持っています。そこで、落合中学校では里山環境整備活動（本校では『緑が丘活動』と呼んでいる）を通して、持続可能な社会づくりにつながる環境学習に取り組んでいます。

生き茂った樹木を生徒たちはのこぎりで切り倒すことから始まります。切り倒された樹木はベンチに利用されたり、炭をつくってピザ焼きなどに利用されます。枝や葉はクラフトの材料や、焼き芋の燃料として利用されます。落ち葉は集められ腐葉土をつくり、花壇や農園に肥料として利用されています。このように、森で出たゴミを一切持ち出すことなく、すべてを資源として再利用しています。

これらの活動は、多くの地域住民のボランティア活動で支えられています。学校支援コーディネーターと落合公民館を通して地域にいる指導者、協力者を探してもらい、事前打ち合わせをしながら授業を実施しているところです。生徒たちは、専門的な知識と技能に触れ、質の高い学習になっています。また、多くの地域の方々とのふれあいの中でコミュニケーション力を高めるとともに、地域の人々に感謝の気持ちと地域のよさを実感しています。

「企画・運営・実施は前進山辺中 S S C で。会場は学校で。」

足利市立山辺中学校 菊 地 廣 光

学校支援ボランティアの活動が始まった。新たに、前進山辺中 S S C（山辺中学校支援ボランティアの名前）が、発足しました。「企画・運営・実施は、前進山辺中 S S C で。会場は学校で。」をテーマに開かれた学校づくりが加速したのです。

開かれた学校とは、学校が開くのではなく、地域とともに開くことです。学校が主体でなく、地域が主体になった時、バランスのある開かれた学校になります。

山辺中学校の学校公開は、PTA主催で年に13回実施しています。校舎3FのPTA会議室で担当の役員が待っています。

一般参加者は参加者名簿に記入後、自由に校内を回ったり、担当者に校内を案内してもらったりします。感想も書いて帰ります。学校公開日を地域の教育力である「前進山辺中 S S C」と「PTA」が協働して今年度は、3本の柱で「開かれた学校」を表現します。

1本目の柱は、「エコたわし」作成です。地域の人々が「エコたわし教室」を図書室で実施します。10回を予定しています。2本目は、「食育」です。食育講座を地域の生活習慣改善推進員（山辺地区さわやかクラブ）と保護者を対象に山辺中の会議室を利用して実施しました。講師は、市の健康増進課職員です。30名の参加がありました。給食を題材に講演も行われました。3回予定しています。3本目は、「米粉料理教室」です。3回（チヂミ・うどん・団子）を子どもの生活リズム向上推進委員会が実施します。地域の婦人団体が県から事業委託され、地域と山辺中 S S C が協働で実施します。会場は山辺中です。



第九期 第1年次の取り組み

宇河地区中学校副校長・教頭会長 高橋 哲夫

本副校長・教頭会は、宇都宮市内の公立中学校25校の副校長26名（1校が複数配置校）と宇都宮大学附属中学校と県立宇都宮東高等学校附属中学校の教頭2名及び上三川町立中学校3校の教頭3名の総計31名で構成されており、会員の研修と親睦を図り、日々教育の研鑽に努めています。

主な活動は、副校長・教頭としての職責を果たすために、各校間の情報交換や資質を高めるための研修を行い、中学校教育の振興に努めることを目的として年間6回の研修を行っています。

本副校長・教頭会では、昨年度までの第八期の研究において、「教育目標・教育理念に関する課題」を受け、「学校文化」という視点から教育目標・ビジョン実現のための学校経営のあり方を探り、副校長・教頭が果たす役割が明確になり、大きな成果をあげることができました。

今年度は、第九期の初年度であり、研究主題「豊かな人間性と創造性をはぐくむ学校をめざして」研究課題「組織・運営に関する課題」を受け、研究テーマを「元気な学校づくりを目指した学校組織の活用ー学校組織マネジメントの手法を活かしてー」として研究を進めることになっております。

新学習指導要領の実施に向けて、新たな教育課題が山積するなかではありますが、本地区の副校長・教頭会の研修の様子を見るにつけ、全会員が同僚性を発揮して協働して調査・研究に取り組んでおり、我々の資質向上と、子どもたちの人間づくりに繋がるものと確信いたします。



「心を一つに」を合い言葉に

那須地区小中学校教頭会長 鈴木 秀信

那須地区教頭会は、大田原市・那須塩原市・那須町の教頭87名（小学校63名、中学校24名）で組織されています。活動単位は大田原市2ブロック、那須塩原市2ブロック、那須町ブロックの計5ブロック体制に分かれ活動しています。

昨年度の関ブロ大会を大成功裡に終え、一区切りが付いたところですが、3・11の東日本大震災という未曾有の災害の中、学校が他の2つの学校に分散して授業を行ったり、体育館の損壊で行事や授業に支障をきたしたりと本地区でも波乱の幕開けとなりました。こうした厳しい状況に負けるものかと全会員が決意も新たに、「心を一つに」を合い言葉としてスタートしたところです。

本年度の主な活動は、全会員が集まる年3回の研修会（公務報告会、ブロック研修会、研究発表会）です。研究発表会は10月28日(金)に2部構成で研究発表と研修会を実施する予定です。大田原Aブロック、西那須野・塩原ブロックに、県や関ブロのリハーサルを兼ねて発表していただきたいと考えております。

第九期の研究主題である「豊かな人間性と創造性」に視点を当て、各ブロックの研究主題が以下のとおり決定しました。大田原A「組織運営(小)」、大田原B「教育課程に関する課題(中)」、那須町「教頭の職務に関する課題」、黒磯地区「教職員の専門性に関する課題」、西那須野・塩原「子どもの発達(中)」です。現在、ブロック内で研究部員を中心にどのような視点からどのような方法で研究を進めるか、副主題をどう設定するか真剣に討議しております。

那須地区は、人柄が良くまとまりのある教頭会であると自負しております。人間性と創造性にあふれた学校づくりを目指し、互いに連携し切磋琢磨する充実した活動になるよう努めたいと思っています。

ひ ろ ば

届けられたかすみ草に思う

宇都宮市立岡本小学校 鈴木 恵 治

創立138年を迎えた本校は、たくさんの木々に囲まれ、緑豊かな学校である。また、校内にも季節の花が飾られている。6月のある日、教室や廊下のあちこちにかすみ草が飾られていた。地域の方が自分の畑で育てたものを届けてくださったものである。刈り取ってすぐに届けてくださったのであろう、その方の額には汗が光っていた。本当にありがたいものであり、学校が地域の方々に支援いただいていることを実感させられるときでもある。

かすみ草は、細く繊細な小枝に無数の白い小花をつけ、花束やフラワーアレンジメントなどの切り花では、脇役的な役割を果たすことが多い。

学校は言うまでもなく子どもたちが主役である。子どもたちが主役としてより一層輝くためには、日々熱心に指導にあたっている教職員、家庭や地域の方々が一体となって子どもたちを育てていくことが不可欠である。

そのために、副校長はネットワーク、フットワーク、チームワークを駆使して、子どもたち一人一人が輝くために学校の脇役の役割を果たしていくものとする。そして自分もそうありたい。

ついでながら、かすみ草の花言葉の1つは「切なる願い」である。

できる！できる！必ずできる!!

真岡市立真岡中学校 大塚 隆 之

7月初旬のある暑い日、本校第2体育館において生徒会主催の選手激励会が行われた。総合体育大会や各種コンクール、展覧会に向けての意気込みや目標が各部から発表され、生徒会長始め役員からエールが送られた。部長の発表の中には、「大会に全力で取り組みたいと思います。」「1つ1つのプレーを全力でやっていきたいと思います。」という言葉が聞かれた。

当日、校長が出張のため自分がメッセージを代読することになった。内容は、「日々の前向きな生活と企画運営した生徒会役員への感謝」「この3週間の最後の練習が非常に重要であること」「全力で頑張るとは、はじめからすべての力をかけて取り組めるよう、生活のすべてをやりくりし調整して臨むこと」「もてる力を出し切ることができるよう、そして納得いく成績を収めることができるよう、生活のすべてをかけて取り組もう」「できる！できる！必ずできる!!皆さんのがんばりを期待しています。」

代読し終わったとき、ふと心に何かを感じました。生徒たちを励ます言葉に自分も励まされていたようです。多忙感を感じる毎日、皆さんもつづやいてみませんか。「できる！できる！必ずできる!!」

里山の豊かな自然に学ぶ

佐野市立閑馬小学校 荒川 知 子

本校での様々な活動に、「さとやま活動」「さとやま検定」「さとやま祭り」などと、里山に位置する学校ならではの活動名が使われています。しかし、残念なことに子どもたちは、豊かな自然環境の中にいながら、あまり自然に関心をもたず、あまりにも自然のことを知らないのが現状です。

そこで、子どもたちに五感をフルに活用して大いに自然に関わる体験をと考えたのが「浅利山登山」です。学校から見える浅利山は、校歌の中にも歌われています。「あざりの城下風さえて」と。学校の目の前に在りながら、その存在は薄れていたのです。ところが、いざ登ってみると先人の思いを至る所に感ずることが出来ます。昔から、この土地の人々に尊ばれてきたことも分かります。

当日は、「6年生との思い出をつくる会」として、縦割り班ごとに行動をしました。大変急な坂もありましたが、班で協力をして全員が無事頂上にたどり着くことができました。山に登ることは、厳しくつらいことであつたにもかかわらず、とてもよい思い出に残ったようです。互いに支え合つたことこそがよい思い出だったのでしょ。う。自然がたくさんのことを教えてくれました。

編集後記

3月に起きた東日本大震災からすでに6ヶ月が経ちました。しかし、あの時感じた恐怖と緊張は、今も深く心に刻まれています。特に大きな被害を被った学校では、現在もプレハブの仮設校舎や他校を間借りしての分散授業など、大変不便な生活が続いていると聞き、心よりお見舞いを申し上げます。

今回の会報は、5月の定期総会や和歌山県で開催された全国研究大会を中心に掲載しましたが、原稿の執筆や写真の提供等のご協力をいただいた会員の皆様に深く感謝いたします。この会報を通して、会員の声が反映され、少しでも本会の目的が達成できれば幸いです。

(長谷川)